

# 帝塚山派文学学会 会報 第9号

発行日：平成31年2月13日

事務局：〒558-0053 大阪市住吉区帝塚山学中3-10-51 帝塚山学院内

実務事務局：電話 080-1460-6616 / Mail: [mryu@maia.eonet.ne.jp](mailto:mryu@maia.eonet.ne.jp)

## 第7回研究会報告

平成30年11月11(日)午後、帝塚山学院同窓会ホールにおいて第7回研究会が18名の参加のもとに開催されました。

第一の発表は本会会員の今井逸郎さん(化学技術アドバイザー)による「帝塚山派文学と放送文化」でした。1946年創設の「劇団ともだち劇場」には帝塚山派文学者が深く関わっており、劇団の名付け親が藤沢恒夫、第一回公演は石濱恒夫の「おねむい王様」、第二回は庄野英二の「北風のくれたテーブルかけ」と石濱の「王様のピクニック」、第三回は庄野潤三の「巴旦杏の木の下」です。今井さんの発表は前半が、大阪中央放送局(JOBK)や日本児童文学の資料をもとに同劇団の系譜をたどり、後半は1950年創設のNHK専属「大阪放送児童劇団」劇団員としての経験を語るもので、戦後の帝塚山派文学者の活動を知ることができる貴重な発表でした。

第二の発表は本会会員内海宏隆さんによる『「英二伯父ちゃんのぼら」をめぐる一考察』でした。庄野潤三の晩年シリーズ、平成八年の『貝がらと海の音』から平成十八年の『星に願いを』までの全十一作で繰り返される「英二伯父ちゃんのぼら」が持つ意味を考察したものです。新築祝いに兄から送られた十本のうち枯れずに残っている一本のぼら。心臓の手術後長く入院し前年に亡くなった兄の英二を思い起こすヨスガであったぼらが次第に「英二伯父ちゃん」そのものに変化していく過程と、英二にとってのぼらの意味を、二人の著作や年譜、関わった人々への取材を通して深く考察した発表でした。

## 第8回研究会報告

平成30年12月9(日)午後、帝塚山学院同窓会ホールにおいて第8回研究会が15名の参加のもとに開催されました。

第一の発表は本会運営委員の一篠孝夫さん(帝塚山学院大学名誉教授)による「石濱恒夫序説—小説家としての側面—」でした。石濱は川端康成に師事した作家で、川端から小説家としての才能を高く評価されていました。発表は昭和二十四年から二十九年の間に書かれた初期連作「ぎやんぐ・ぼうえつと」、「ジプシイ大學生」、「らぶそでい・いん・ぶるう」、「続らぶそでい・いん・ぶるう」に描かれた戦災から復興していく大阪とそこにたむろする人々の姿を、作者自身が直面した結婚に対する親の反対、結婚生活の破綻といった伝記的事実と突き合わせ、石濱の小説とはどのようなものかを突き止めようとしたものです。石濱の小説に関する最初の本格的な論と言えるでしょう。

第二の発表は本会会員の宮坂康一さん(帝塚山学院大学専任講師)による「杉山平一『夜学生』と『四季』——「まがりくねってかくして云う」ということ—」でした。杉山が昭和十年から『四季』に発表していた詩を昭和十八年に処女詩集『夜学生』として編む際の取舍選択に注目して、杉山の詩法を探ろうとしたものです。その結果、杉山の作風が昭和十二年前後に確立し、それ以後その方法が多く使われていることが明らかにされました。その方法とは、観察する側とされる側が、内に秘めた「孤独」ゆえに、接近することをこの上ない喜びとして受け止めていく過程を表現するというものです。杉山の詩の魅力を明らかにしようとする意欲的な発表でした。

## 第9回研究会開催のお知らせ

下記の通り、本学会第9回研究会を開催します。

会場の都合により開催日時が変更になりましたのでご注意ください。(3月24日→3月10日)

日時：平成31年3月10日(日)13:30、会場：帝塚山学院同窓会ホール

発表Ⅰ：「ABC こどもの歌」吉住公男(本学会会員)

発表Ⅱ：「秋田實」藤田富美恵(本学会会員)